

歩行開始期の子どもをもつ親世代と祖父母世代の世代性

高濱 裕子・北村 琴美
佐々木尚之・木村 文香

[Abstract]

The purpose of this study was to investigate a difference in the nature of generativity (Erikson, 1989) between parents and grandparents. The subjects were 690 parents who have at least a toddler as well as 204 grandparents recruited through the parents. The results supported a 3-factor model: creating, offering, and generativity maintaining.

Whereas the factor score of “creating” among parents was significantly higher than the score among grandparents, there were no significant differences in other 2 factor scores. Compared to the results of existing studies, the mean scores of grandparents in this study were lower. In addition, grandparents in this study were likely to respect parenting styles of their offspring and be aware of their unique role as grandparents. The nature of generativity among both generations was discussed based on the shift of socioeconomic status and family composition.

Keywords: parents, grandparents, generativity, toddlers, life-span development

問 題

わが国における親子関係の研究を概観すると、特定の時期の親と子どもの関係に焦点が当てられてきたことが明らかである（氏家・高濱，2011）。例えば子どもの急激な心身の発達は、親子関係に変化をもちこむとともに、親と子で構成される親子システム（あるいは家族システム）を不安定にすることが知られている。一般に子どもの反抗期と認識される歩行開始期や思春期の親子関係は、そのような理由から様々な要因と絡めて検討の対象とされてきたのである（杉村，2011；高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤，2008；高濱・渡辺，2012）。

親子関係を生涯発達の視点で検討する意義

親と子どもの関係は子どもの誕生から始まるが、子どもの心理的・社会的自立によって完結するわけではない。子どもは長じて親となるが、その時点でそれまで親であった世代は祖父母となる。したがって、新たな親-子関係と同時に新たな親-子-祖父母関係も始まるのである。つまり、生涯発達の観点からとらえると、従来の親子関係の研究は、親子の成育史の一断面を切り取ったにすぎないことがわかる。

とはいえ、親子関係に生涯発達の視点を導入すると、世代間のダイナミズムをいかにとらえるかが鍵になると考えられる。新たに誕生した子ども（G3と呼ぶ）を迎えると、それまでの子どもは親（G2と呼ぶ）になり、それまでの親は祖父母（G1と呼ぶ）になる。それまでの親子関係の歴史を内包しつつも、これまでとは異なる2者あるいは3者関係が展開することになる。わが国には、このような2世代あるいは

3世代の関係を検討しようとした研究はほとんどない。かつての家族研究には、嫁-姑関係や同居の2世代あるいは3世代の関係を検討した社会学的な視点を有する研究はあった（日出幸ら，2003；三輪ら，2006；八重樫ら，2003）。しかし，同居世帯が激減した現代（内閣府，2011）において，生涯発達の観点を導入した新たな親子関係の研究が必要とされている。

諸外国に比べて極めて短期間のうちに高齢化社会を迎えたわが国では，高齢者の主観的幸福感を検討する研究が行われている（例えば田淵ら，2012）。そこでの研究者の関心は老年期の適応にあるため，配偶者との死別，子ども世代との関係，心身の健康状態，経済的状态といった多くの要因とサクセスフルエイジング（successful aging）との関連性が検討されている。

世代性という概念の意味するもの

世代性（生殖性^註）とは，次世代を確立させて導くことへの関心であり，生きとし生けるものに対する世話（offering）という世代継承的課題に必要なものである（Erikson, 1982）。

Eriksonによれば，成人期の心理社会的危機は「生殖性（generativity）対 停滞（self-absorption and stagnation）」である。生殖性は，「子孫を生み出すこと，生産性（procreativity），創造性（creativity）を包含するものであり，（自分自身の）更なる同一性の開発に関わる一種の自己-生殖（self-generation）も含めて，新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すこと（generation）を表す（p.88）」した。したがってErikson流に考えれば，世代性は血縁関係のある親子間の世代性をも包含するより大きな概念と考えられる。

とはいえ，欧米及びわが国において行われた世代性に関する実証研究はきわめて少ない（例えばMacAdams et al., 1992；丸島，2009；齋藤・星山・宮原，2004）。これらの研究からは，パーソナリティ発達は精神的健康度と関連すること，世代性は若い成人より中年，高齢者のように年齢とともに発達すること（McAdams et al, 1992；丸島；2009），人格の成熟度の高いものは次世代育成力が高いこと（齋藤・星山・宮原，2004）などが見出されている。

パーソナリティ研究における世代性研究の流れ

丸島（2009）は，Erikson（1982）及びMcAdams et.al（1992, 1998）に依拠しつつ，わが国の文化的特徴を考慮した世代性尺度日本語版を開発した。

丸島は，世代性の仮説構成概念として関係性と個性性の二つの柱と成人に対する期待とを想定し，そこに三つの領域，①創造性（creativity），②世話（offering），③世代継承性（generativity, maintaining）を組み込んで考えた。なお彼女は，世代性の定義である「親であること」を第一義的とする視点から離れ，子どものない，育てることなどを直接体験しない成人も含めて，どのような成人に対しても偏らない測定ができる尺度構成を意図したとしている。したがって，血縁関係のある2世代関係と比較した場合，その共通点や相違点を明らかにすることが必要であろう。

わが国では，少子高齢化の進行とともに，親子備軍である成人期の親準備性や養護性の欠如が問題視されてきた（陳，2007；金谷，2008）。そこでの議論は，乳幼児と接触したり世話をしたりする経験のないまま子どもの養育を始めざるをえない成人に焦点が当てられている。子どもに対する虐待や不適切な養育が多様な要因のトランザクションという観点からではなく，パーソナリティ発達との絡みで語られることも多い。

血縁関係のある2世代の世代性の検討

我々は歩行開始期と思春期に焦点化し、この時期の子どもをもつ親と祖父母の世代性について検討するプロジェクトを遂行中である。血縁関係のある2世代の世代性を検討することには、2つの意義があると考えられる。第一に、わが国の最近の2世代関係あるいは3世代関係の実情を示すデータがほとんどないことから、それを明らかにできる点である。第二に、比較可能な丸島のデータを参照することにより、時代推移や血縁の有無による相違があるのか否かを明らかにできる点である。

以上の議論にもとづき、本研究では子どもの心身の発達に著しい変化が出現する歩行開始期に焦点を当て、親と子、親とその親（祖父母）、祖父母と孫（子）の世代間の関係を検討する。我々は丸島の開発した尺度を用いてこの時期の子どもをもつ親世代と祖父母世代の世代性を測定し、成人期以降の世代性の発達を検討する。具体的にはこれら2世代間に差があるのか否か、あるとしたらどのような差なのか、その差が何を示すのかを検討する。その際に、世代性と祖父母の意識との関連を見ることによって、上述の傍証を得たいと思う。

方 法

対象者：対象は、歩行開始期の子ども（平均月齢27.7か月，SD9.3）をもつ親690名（平均年齢34.5歳，SD4.5）と、その親を通して紹介された祖父母204名（平均年齢63.1歳，SD5.7）であった。この年齢の子どもが集まるポリオの予防接種会場、歯科検診会場などで協力者を募集した。加えて、当該年齢の子どもが通う保育所などを通して協力者を募集した。祖父母世代へのアクセスは、親世代の紹介により行われた（具体的には、親世代の回答票に祖父母の氏名や住所を記入してもらった）。このようにして紹介された祖父母266名のうち、204名から研究協力を承諾する回答が得られた。なお回答した祖父母世代と親世代との関係を、Table 1に示した。

Table 1 回答した祖父母世代と親世代との関係

G1とG2との関係	割合 (%)
実 母 - 娘	79.9
実 父 - 娘	10.8
義理母 - 嫁	1.9
義理母 - 婿	1.5
実 母 - 息子	0.1
回答なし	5.8

注 G1の孫の平均人数 3.17人（範囲：1-9、年齢の幅：0-20）

調査地域：関東地区（A区，B市）と関西地区（C市，D市，E市，F市）であった。

調査時期：2011年9月から同年12月までであった。

調査内容：調査内容は次の項目から構成された。2世代の交流頻度やその内容，居住距離，祖父母からの援助（経済的・道具的・精神的），祖父母への援助（経済的・道具的・精神的），しつけに対する助言，子どもの状況（祖父母への親密度，反抗や自己主張），育児状況と育児についての考え，世代性，精神的

健康度、夫婦の性別役割観、配偶者や家族の状況、最終卒業校、就労状況・収入などであった。基本的に2世代に同じ質問をしたが、祖父母世代には反抗や自己主張に変えて、祖父母としての認知を尋ねた。

分析：PASW® Statistics 18を使用した。

結 果

1. 世代性尺度の因子分析

世代性尺度20項目（丸島・有光，2007）について、親世代と祖父母世代のそれぞれに因子分析を行った。因子分析は先行研究にならひ、主因子法、プロマックス回転を採用した。先行研究の結果と比較するために、共通性や因子負荷量が若干低めでも、項目を削除しなかつた。因子分析の結果を、Table 2-1 と Table 2-2 に示した。

Table 2-1 親世代の世代性尺度因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
第1因子 創造性				
私はものを考えるときかわった考えができる	.725	-.045	.029	.521
私は大多数の人と違ったところがあるように感じる	.698	-.097	-.098	.416
私は変わったことやめずらしいことをするのが好きだ	.678	-.016	-.039	.436
私は自分がすることはたいへん新しく創造的であるように努めている	.664	-.080	.124	.479
私は他人がびっくりするようなことをしたり、物を創ったことがある	.653	-.027	.101	.472
私は夢のようなことを考えるのが好きだ	.519	.066	-.144	.259
私は問題を解いたりものを作ったりしているときがいちばん楽しい	.437	.062	.047	.232
私は何かを考えていい考えが浮かんだときとてもうれしく感じる	.417	.159	-.018	.238
第2因子 世話				
私は他人の面倒をよくみる	.000	.746	-.025	.546
私は悲しんでいる人を見たらなぐさめる	-.015	.716	-.016	.499
私は困っている人を見ると、つい手助けしたくなる	.107	.700	-.072	.522
私は奉仕活動に喜んで参加する	.045	.580	.057	.380
私は相手の話に耳を傾ける	-.083	.549	.040	.289
私は子どもの世話をよくする	-.104	.424	.033	.167
私は次世代のために、環境汚染につながることをしないように極力努めている	.026	.300	.077	.117
第3因子 世代継承性				
私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う(-)	-.117	-.078	.741	.479
私は、他人に寄与するような価値のあることは何もしていないと思う(-)	-.064	-.003	.675	.410
私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う	.018	.072	.608	.427
私は、自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた	.132	.030	.483	.309
私は自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた	.092	.135	.455	.309
回転前の累積因子寄与率	46.34%			

注. (-)は逆転項目を示す

因子間の相関（親世代）

	F1	F2	F3
F1	—	.344	.359
F2	.344	—	.295
F3	.359	.295	—

Table 2-2 祖父母世代の世代性尺度因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
第1因子 創造性				
私は自分がすることはたいへん新しく創造的であるように努めている	.778	-.108	.140	.649
私は他人がびっくりするようなことをしたり、物を創ったことがある	.774	-.201	-.030	.513
私はものを考えるとき変わった考えができる	.740	-.029	.006	.536
私は変わったことやめずらしいことをするのが好きだ	.676	.131	-.187	.456
私は夢のようなことを考えるのが好きだ	.676	.026	-.094	.427
私は大多数の人と違ったところがあるように感じる	.675	-.041	-.149	.385
私は何かを考えていい考えが浮かんだときとてもうれしく感じる	.591	.136	-.093	.382
私は問題を解いたりものを作ったりしているときがいちばん楽しい	.467	.000	-.055	.201
第2因子 世話				
私は困っている人を見ると、つい手助けしたくなる	.091	.895	-.234	.749
私は悲しんでいる人を見たらなぐさめる	-.095	.783	-.059	.540
私は他人の面倒をよくみる	.082	.657	.141	.576
私は奉仕活動に喜んで参加する	-.050	.547	.152	.362
私は相手の話に耳を傾ける	-.071	.535	.052	.285
私は子どもの世話をよくする	-.089	.467	.105	.236
私は次世代のために、環境汚染につながることをしないように極力努めている	.096	.245	.180	.166
第3因子 世代継承性				
私は、自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた	.187	.071	.657	.217
私は自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた	.285	.113	.506	.240
私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う(-)	-.309	-.036	.496	.131
私は、他人に寄与するような価値のあることは何もしていないと思う(-)	-.194	.000	.391	.614
私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う	-.022	.222	.370	.530
回転前の累積因子寄与率	49.15%			

注. (-)は逆転項目を示す

因子間の相関（祖父母世代）

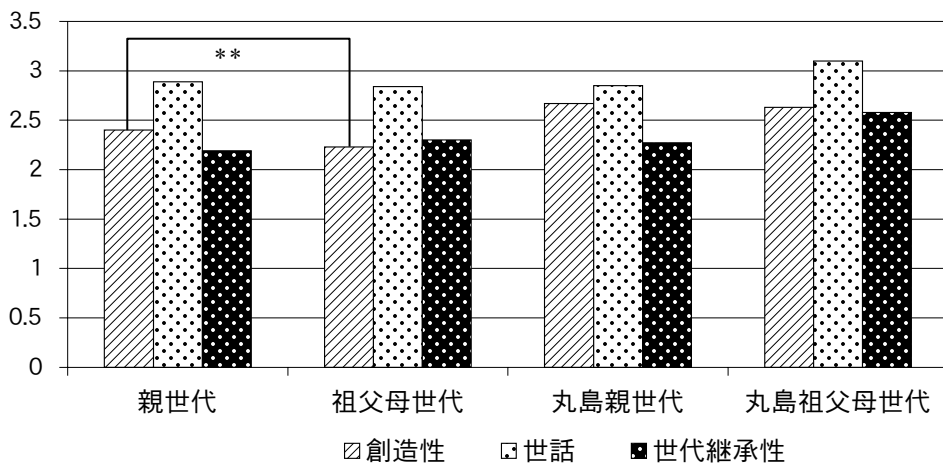
	F1	F2	F3
F1	—	.364	.392
F2	.364	—	.379
F3	.392	.379	—

親世代と祖父母世代ともに3因子構造が確認され、下位尺度項目のまとまり方も先行研究と全く同じ結果がえられた。

第1因子は「創造性」、第2因子は「世話」、第3因子は「世代継承性」と命名された。各因子の α 係数は、親世代が.82, .78, .75で、祖父母世代は.85, .81, .63であった。因子間相関は概ね.29~.39、因子寄与率は親世代が46.3%、祖父母世代は49.2%であった。

2. 世代別の尺度得点と世代間の差

次に、親世代と祖父母世代の世代性にどのような差異があるのかを検討する。ここでは本サンプルの特徴を描出するために、丸島の結果（調査は1999年～2000年に実施された）を併記することにした。親世代と祖父母世代の下位尺度得点の平均値と丸島の結果を、Figure 1に示した。



** $p < .01$

Figure 1 創造性・世話・世代継承性得点：本サンプルと丸島サンプルとの比較

まず本サンプルの各下位尺度得点は、第1因子の「創造性」の平均値については、親世代が祖父母世代より有意に高かった ($p < .01$)。第2因子の「世話」は親世代と祖父母世代ともに3因子の中で最も高い平均値を示したが、2世代間に差はなかった。第3因子の「世代継承性」の平均値も2世代間に差がなかった。

さらに分散の値から個人差をみると、「創造性」の個人差はやや大きく (.272と.288)、特に祖父母世代の個人差は親世代より大き目であった。「世話」の個人差は2世代とも小さかった (.184と.192)。「世代継承性」は親世代の個人差が父母世代より大きかった (.316と.211)。

本研究で得られた平均値は、丸島の結果よりおしなべて低目であった。とりわけ、丸島の研究結果では、祖父母に該当する世代の得点が総じて高い。

3. 世代性の下位尺度における世代間の差

次に、世代性の下位尺度20項目について、世代間の差を検討するためにt検定をおこなったところ、7項目に有意な差が認められた。

「創造性」では、次の4項目で親世代の平均値が祖父母世代よりも有意に高かった。すなわち、「私はものを考えるときかわった考えができる」($p < .01$)、「私は他人がびっくりするようなことをしたり、物を創ったことがある」($p < .01$)、「私は夢のようなことを考えるのが好きだ」($p < .01$)、「私は何かを考えていい考えが浮かんだときとてもうれしく感じる」($p < .05$)であった。

「世話」では、3項目の平均値に有意な差が認められたが、次の2項目では親世代の平均値が祖父母世代よりも高かった。すなわち、「私は困っている人を見ると、つい手助けしたくなる」($p < .01$)、「私は悲しんでいる人を見たらなぐさめる」($p < .05$)であった。また、次の1項目は祖父母世代の平均値が親世代より高かった。「私は次世代のために、環境汚染につながることをしないように極力努めている」($p < .01$)。

なお、「世代継承性」の下位項目には、2世代間に有意な差は認められなかった。

先行研究においても「創造性」の得点は、より若い層に高い傾向が認められている。育児の真っ只中にある親世代に対して、祖父母としての経験がそれほど長くはない祖父母世代という背景が影響しているのかもしれない。

4. 祖父母世代の孫育てや役割に対する意識

祖父母世代の子育てや孫育てに対する意識を明らかにするため、「お子さん夫婦の子育て」、「現代の子育て知識」、「親であった時と祖父母になっての違い」、「祖父母の役割」、「孫が誕生してからの変化」の5項目について4段階で回答を求めた。これらの平均値をFigure 2からFigure 6に示した。

「お子さん夫婦の子育て」については、平均値が中央値の2.5を超えた項目はなかった。

「現代の子育て知識」の中では、「自分が身につけた子育てに関する知識やかかわり方だけでは、現代の子育てにはうまく対処できない」が中央値を超え、「祖父母と親とで子育ての方針や考え方が違う時には、基本的に親の考えを尊重した方がよい」がとりわけ高い平均値を示した。

「親であった時と祖父母になっての違い」については、「今の方が精神的余裕がある」、「今の方が経済的余裕がある」、「今の方が時間的余裕がある」が中央値を超えた。

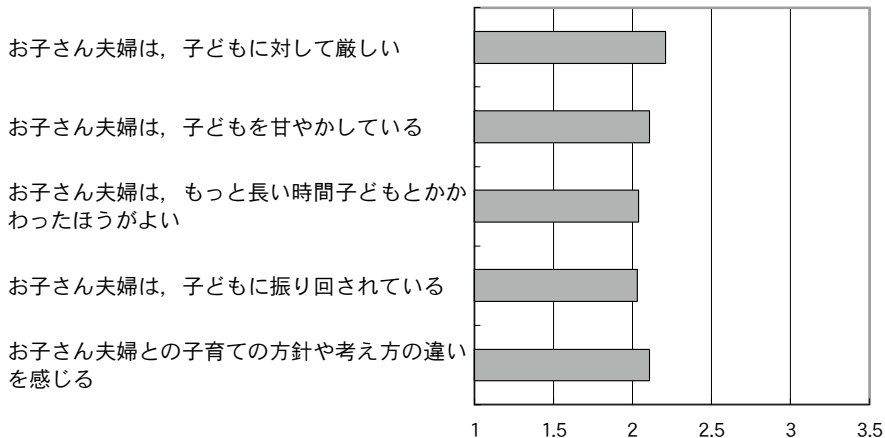


Figure 2 お子さん夫婦の子育て

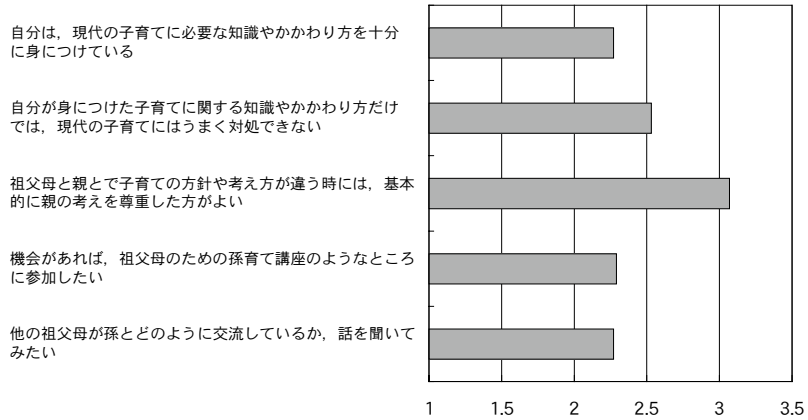


Figure 3 現代の子育て知識やかかわり方

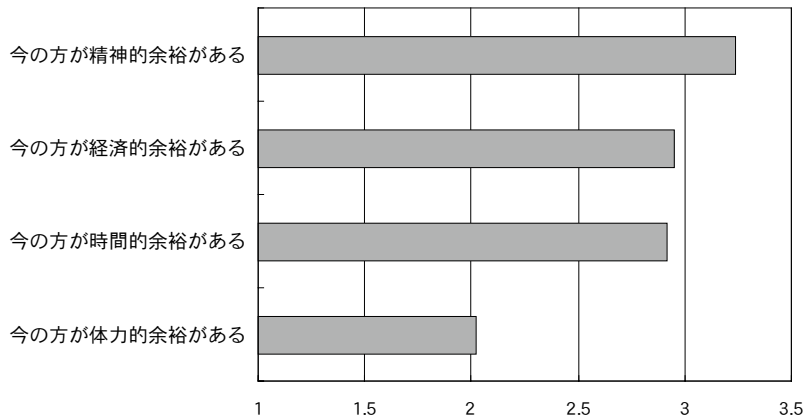


Figure 4 親であった時と祖父母になったの違い

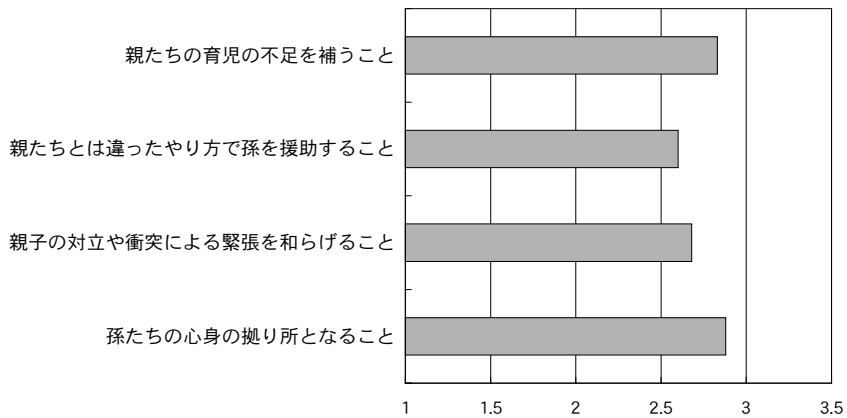


Figure 5 祖父母の役割

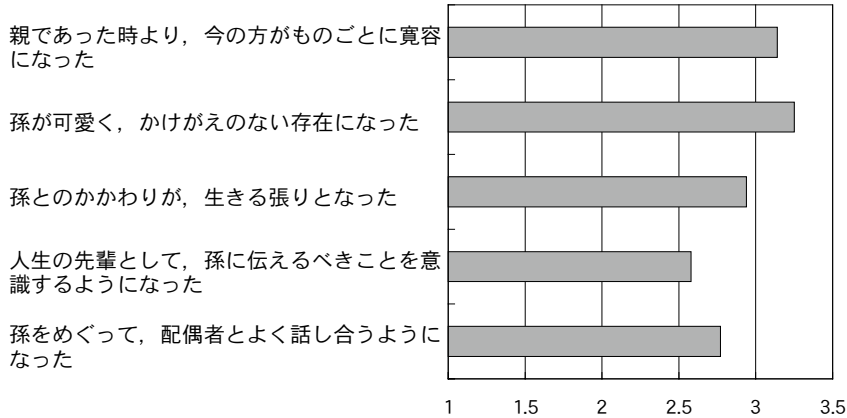


Figure 6 孫が誕生してからの自分の変化

「祖父母の役割」については、4項目全てが中央値を超え、とりわけ「親たちの育児の不足を補うこと」、「孫たちの心身の抛り所となること」の平均値が高かった。

「孫が誕生してからの変化」は、全ての回答が中央値を超えた。その中でも、「孫が可愛く、かけがえのない存在になった」や「親であった時より、今の方がものごとに寛容になった」、「孫とのかかわりが、生きる張りとなった」の平均値が高かった。

5. 世代継承性と祖父母の意識との関係

最後に、祖父母の世代継承性（第3因子）と祖父母の孫育てや役割に対する意識との関連を検討する。前節で検討した5つの項目群のうち、「親であった時と祖父母になってからの立場の違い」についての項目群を除いた4項目群の合計19項目について、祖父母の世代継承性との相関係数を求めた。

19項目のうち、有意な係数5項目のみをTable 3に示した。それらは「自分は、現代の子育てに必要な知識やかかわり方を十分に身につけている」、「他の祖父母が孫とどのように交流しているか、話を聞いてみたい」、「(祖父母の役割は) 親たちの育児の不足を補うこと」、「(祖父母の役割は) 孫たちの心身の抛り所となること」、「人生の先輩として、孫に伝えるべきことを意識するようになった」であった。ある程度、孫育てに関心のある祖父母や孫育てに自信のある祖父母が含まれていることが推測される。

Table 3 祖父母の世代継承性と祖父母の意識との相関

項目	相関係数
自分は、現代の子育てに必要な知識やかかわり方を十分に身につけている	.258***
他の祖父母が孫とどのように交流しているか、話を聞いてみたい	.181*
親たちの育児の不足を補うこと	.162*
孫たちの心身の抛り所となること	.277***
人生の先輩として、孫に伝えるべきことを意識するようになった	.263***

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

本研究は、歩行開始期の子どもをもつ親世代とその祖父母世代の世代性を比較検討した。因子分析によってえられた3因子（創造性、世話、世代継承性）のうち、親世代の創造性の平均値が祖父母世代より有意に高かった。他の2因子には有意な差はなかった。また本研究の結果は、丸島の結果を一部裏づけたが、相違も示した。このような違いは、サンプルの特徴を反映している可能性が考えられる。丸島のサンプルの中には生涯学習講座などへの熱心な参加者が多く含まれていたためと考えられる。彼らはこうした調査に対する関心が高いことが知られている。もうひとつの可能性として、時代による変化も推測される。本研究は子育て真っ最中の親とその祖父母を対象としたため、ごく日常的な意識をすくい取ったと考えられる。したがって、本研究の結果が現在の日本の世代関係の実情を反映する可能性は高いと推測される。

祖父母世代が親世代の子育てをどう見ているか、あるいは孫育てにおける祖父母の役割をどう感じているかを検討した結果、祖父母世代は、親世代に対してそれほど批判的ではなかった。「子育ての方針や考え方が違う時には基本的に親の考えを尊重した方がよい」が中央値を超えていた。

「自分が身につけた子育てに関する知識やかかわり方だけでは、現代の子育てにはうまく対処できない」も平均値が高目であることから、祖父母世代は育児知識の変化も認識していると考えられる。本サンプルでは実母と娘の関係が約80%を占めるが、わが子の子育てに肯定的な態度がうかがえる。

祖父母役割については、「孫たちの心身の拠り所となる」、「親たちの育児の不足を補う」、「親子の対立や衝突による緊張を和らげる」、「親たちとは違ったやり方で子どもを援助する」の平均値が高かった。これは、Smith & Drew (2002) によるアメリカの祖父母と孫の関係にも共通する結果と考えられる。祖父母のかかわりが親子関係の不調和や葛藤を緩衝し、孫世代をサポートする効果が見出されたというのである。

祖父母になってからの自分自身の変化については、「今の方が精神的余裕がある」をあげた者が多かった。孫が誕生してからの変化として、「孫がとても可愛くかけがえのない存在になった」、「親であった時より今の方がものごとに寛容になった」、「孫とのかかわりが生きる張りとなった」、「孫をめぐって配偶者とよく話し合うようになった」の平均値が高目であった。概ね肯定的な変化を認識しているが、これらはErikson et.al (1986) のいう祖父母の生殖機能 (grand-generative function) を保持していることを示すと考えられる。また祖父母の世代継承性とこれらの項目との相関分析によって、世代継承性のポジティブな側面が明らかになったと考えられる。つまり、自分の子どもや孫との関係をも包含するより大きな概念を示唆しているのかもしれない。

平成23年度版高齢社会白書 (2011) によれば、わが国の高齢者が子どもと同居する割合は65歳から69歳では男性、女性ともに40%弱であった。とはいえ80歳以上の同居率は、男性は約44%、女性は約60%と高率であった。65歳以上の高齢者について同居率の時代推移を見ると、昭和55年 (1980) にはほぼ70%であったが、平成11年 (1999) に50%を割り、平成21年 (2009) には43.2%と減少の一途を辿っている。同居率の減少には、子ども (G2) 側と親 (G1) 側双方の様々な要因が関与していると思われる。時代背景、社会経済的要因、上述した世代間の意識の変化などが推測される。

本論では扱えなかったが、祖父母の親世代に対する理解が当初からこのように肯定的だったのか、あるいは紆余曲折をへた結果としての到達点なのかは不明である。2世代関係を検討するためには重要な内容と考えられるので、面接調査を実施してさらなる検討が必要であろう。

また2世代が距離的に近い場所に居住する近居なのか、最新のツールであるスカイプやメールなどによ

るコミュニケーションの頻度がどうなのかといったこととも関連があるだろう。そして、2世代間のやりとりという場合、何をやり取りしているのだろうか。情報やもののやり取りを通して、世代間で交換されるものが情動である可能性が示唆される。

われわれのプロジェクトではこれらに関わるデータも収集済みなので、今後分析に組み込んでいく予定である。

文 献

- 陳省仁. (2007). 現代日本の若者の養育性形成と学校教育. 子どもの発達臨床研究, 1, 19-26.
- Erikson, E.H. (1982). *The life cycle completed*. New York: W.W.Norton. (村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳) (1989). *ライフサイクル, その完結*. 東京: みすず書房).
- Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W.W.Norton. (朝長正徳・朝長梨枝子, 訳) (1990). *老年期: 生き生きしたかわりあい*. 東京: みすず書房).
- 日出幸昌江・天富美禰子. (2003). 子育てにおける祖父母世代の参加: 幼老共生の暮らしに向けての考察. 大阪教育大学紀要, 第II部門, 51(2), 139-152.
- 金谷有子. (2008). 大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究. 埼玉学園大学紀要(人間科学部篇), 8, 119-127.
- 丸島令子・有光興記. (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討. 心理学研究, 78, 303-309.
- 丸島令子. (2009). *成人の心理学: 世代性と人格的成熟*. 京都: ナカニシヤ出版.
- McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report. Behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- McAdams, D.P., Hart, H.M., & Maruna, S. (1998). The anatomy of generativity. In D.P.McAdams, & E. de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development*. Washington, D.C.: American Psychological Association. pp.7-43.
- 三輪聖子・内田照彦・木澤美津子. (2006). 次世代育成支援における祖父母の役割について: 母親の子育て不安との関わり. *岐阜女子短期大学紀要*, 35, 79-83.
- 内閣府. (2013). 平成23年度版高齢社会白書. <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/html/s1-2-1-02.html> 2013年9月21日参照
- 齋藤幸子・星山佳治・宮原忍. (2004). 少子社会における次世代育成力に関する調査. *J. Natl. Inst. Public Health*, 53(3), 218-227.
- Smith, P.K., & Drew, L.M. (2002). Grandparenthood. In Marc H. Bornstein, (Ed.), *Handbook of Parenting*. Vol.3. Lawrence Erlbaum.
- 杉村和美. (2011). 3.青年期. 氏家達夫・高濱裕子. (編著), *親子関係の生涯発達心理学*. (pp.78-93). 東京: 風間書房.
- 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子. (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス: 母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係. *発達心理学研究*, 19, 121-131.
- 高濱裕子・渡辺利子. (2012). 日本の幼児の自己主張はなぜ洗練されないのか: 2歳, 2歳半, 3歳時点の自己主張の変化と親の認知. *お茶の水女子大学人文科学研究*, 8, 1-13.
- 田淵恵・中川威・石岡良子・権藤恭之. (2012). 高齢者の世代性および世代性行動と心理的Well-beingの関係. *日本世代間交流学会誌*, 2(1), 19-24.
- 氏家達夫・高濱裕子. (2011). *親子関係の生涯発達心理学*. 東京: 風間書房.
- 八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子. (2003). 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響.

川崎医療福祉学会誌, 13(2), 233-245.

注. “世代性” という訳語を使ったのは、鏝・山本・宮下（1984）が最初である。その理由は、Eriksonが含蓄させた生み、育み、世話する点を重視したからと説明されている。

付 記

本研究は、平成23年度－25年度科学研究費補助金、基盤研究(C)（課題番号23530848、研究代表者 高濱裕子）の補助を受けて行われた。本研究にご協力くださった親世代、祖父母世代のみなさま、関東圏及び関西圏の市や区の行政担当の方々、保育所のみなさまに感謝申しあげる。